

本光寺 飛龍 仏教壮年会報

婦人会だより 合同版

2007(平成19)年

6月発行 No.45

● 境内や裏の樹木の移動がやっとできました。会館工事の間避難させていた木がやっと戻ってきました。しっかり根付くかどうか心配ですが、これは木のがんばりに任せるしかないようです。裏庭のもみじ、表の梅が元気をなくしているようです。もうじき梅雨の季節ですが、ほどほどの雨が降ってくれば有難いのですが。そして、夏もほどほどの陽射しをお願いしたいところです。



● 会館使用規定をお読みいただいたでしょうか。ちょっと面倒なようですが、規定を設けたほうが借りやすいし、余計な心配をしなくていいとの意見があり、決めさせていただきました。使



ってみたい方がいらっしゃいましたら、ご連絡ください。

仏壮例会のお知らせ

6月27日(水)午後7時より

会費 2000円

出欠は国分会長まで

連絡してください

(Tel: 27-8066)

入会希望の方もおいでください。

年会費 3000円まだの方
ご面倒ですが お届けください

- 6月はいろんな集まりがあります。まとめてご案内を差し上げますので、ご覧ください。
6月17日(日) 若松組仏教壮年会連盟総会 別紙案内の通り 国分会長に出欠の連絡を
6月17日(日) 生と死を考える会津セミナー 別紙案内の通り 入場券は本光寺にあります。
6月19日(火) 聖典輪読会 午後7時から9時まで 門徒会館にて
仏説無量寿経を読みます
6月27日(水) 仏壮例会 別紙案内の通りです。国分会長に出欠の連絡を
ご門主の「世のなか安穏なれ」を資料に、勉強をいたします。
6月28日(木) 見頃西光寺ほたる狩り 上野龍映住職からお誘いがありました。
見頃のお寺の近くの谷で蛍が見られます。見頃のお寺の仏壮がお待ちです。
ご希望の方は本光寺までお申し出ください。
7月1日(日) 若松組門信徒のつどい 別紙案内の通り 18日までに申し込みください。
会場はちょっと遠く田島の町をさらに南にむかった 荒海 です。
若松を8時に出発、帰宅は午後5時ころになります。

「たしなみ」を通して御同朋の心を

本願寺第八代蓮如上人の頃、越中赤尾の道宗という熱心なご門徒の言葉に「一日のたしなみには朝つとめにかかさじとたしなむべし。一月のたしなみにはちかきところ御開山様の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ、一年のたしなみには御本寺へまゐるべしとたしなむべしと云々」とあります。当時、年に一回の本山参りは簡単ではなかったと思います。篤信であるとともに、条件にも恵まれていた方です。忙しい現代人には毎朝の仏前礼拝、毎月のお寺参りも、簡単ではないでしょう。

阿弥陀如来は、光といのちに限りのない如来さまですから、いつでもどこでも、阿弥陀如来は私と一緒にです。そうであるならば、なぜ、近くのお寺、京都の本山にお参りするのでしょうか。これは、義務や命令ではなく、たしなみという言葉に手掛かりがありそうです。

辞書には、「こころがけ」とあります。口では、いつでもどこでも、と言いながら、ついつい忘れたり、仏法から離れがちになる私が、身をもって行動するところに、大切な意味がありましょう。道宗は「油断あるまじき」とも言っています。親鸞聖人のおんに座れば、怠けがちな私が、お念仏を申し、仏法を思い、わが身を省みます。そこで、やっぱり、阿弥陀如来は、南無阿弥陀仏となって、いつでもどこでも、私のところにいてくださる、喚んでいてくださると味わわれるのです。

本願寺には、宗祖親鸞聖人のご真影さまがいらっしゃることで併せて、各地からご参拝の方々と一緒に、お参りできます。人びとと共に歩む、世界の人びとにも心を開くという御同朋の心を育てるご縁になってほしいと思っています。

「大乘」2007年6月号より

ひかりの中で

大平 光代

「感謝」と「共感」を子どもたちに伝えたい

浄土真宗の教えを学ぶために、中央仏教学院に入学したのは平成16年9月のこと。早いものですね、もうすぐ3年間の通信教育専修課程を修了する予定です。

本当は昼間に1年間通学するつもりで、準備万端ととのえていたのですが、大阪市助役というお話が降って湧き、やむを得ず通信教育に変更しました。その後、助役辞任、結婚、出産と公私にわたってめまぐるしい日々でしたが、勉強を続けてきたことが私の支えになっています。

仏教を勉強しなくっちゃ、と思ったのは弁護士として少年事件を担当するようになってから。人を傷つけた子に「手をつねってごらん、痛いやろ」と諭すと、「自分は痛いけど相手のことは知らん」という

反応に出会うことが多くなってきたのです。以前の不良は私も含めて、少なくとも人の痛み（心も身体も）はわかっていました。ケンカをしても、刃物を振り回しても、それ以上はダメという一線を知っていたように思います。ブレーキが効かないどころか、相手が死んでしまうことにも全く意識が及ばない子を前に、「何がこうさせたのか」と首を傾げる日々が続きました。

そんな時、ある企業のトップの方がおっしゃった「敗戦後、宗教教育が取り払われて、日本人の“心の柱”がなくなりましたね」という言葉にハッとしました。子どもたちに心を取り戻すには、私自身が心を学ばなければ……。

子どもはいろいろなことを吸収しながら育っていきます。だからこそ、大人は良いこと、正しいことを伝えていく義務があると思います。「おかげさま」「ありがたい」「おたがいさま」、そんな感謝と共感の心がわかる子どもが増えていくことを願っています。

「大乘」2007年6月号より

